

# 負の記憶の景観化

## — 神風連の乱・秋月の乱・萩の乱を事例に —

大 平 晃 久

Shaping Negative Memories in Landscape:  
the Case of the Samurai Class Rebellions in the Early Meiji Era

Teruhisa OHIRA

### I はじめに

近年の人文科学では、社会的な記憶、すなわち、ある社会における過去認識のありように着目することが、一つの視点として定着している。ある社会、集団の目的に沿う形で、過去がいかに意味づけられ、利用されてきたか、様々に解明されてきた<sup>1)</sup>。また、ノラ (Nora, P.) らによって都市、建築物、行事、人物、国旗など様々なものが記憶の根付く場として機能し、アイデンティティ形成の紐帯となってきたことも論じられてきた<sup>2)</sup>。

過去を意味づけるために意図的に設けられたメディアがモニュメント (記念碑、慰霊碑) である。モニュメントを記憶、過去認識の視点から個別具体的に論じた研究は数多い。しかし、景観のなかに場を占める、メディアとしてのモニュメントの特性を一般的に論じる研究は少ない。一般化を志向した研究として、本稿ではフット (Foote, K.E.) の論考に注目する。アメリカの歴史地理学者、フットは、アメリカにおける戦争や大量殺人、事故の記憶がどのように景観の中に表現されているか、モニュメントのない、記念されない景観にも着目しつつ考察している<sup>3)</sup>。そして、負の記憶の景観化を次の4つに類型化した。

「聖別 sanctification」(英雄的行為や共同体のための自己犠牲などを賞揚、記念碑・慰霊碑のほか儀礼的行為が付属)

「選別 designation」(聖別のようにその場所を神聖視しないが記念碑など設置)

「復旧 ratification」(名誉／不名誉の意義づけされず原状に回復、忘却)

「抹消 obliteration」(恥辱あるいは不名誉の場所と意義づけ、回復されることなく放置)

フットの4類型を検証するため、本稿では負の記憶の景観化の事例として、明治初期、1876 (明治9) 年に連続して起こった三士族反乱、すなわち神風連の乱、秋月の乱、萩の乱を取り上げる。日本国内の負の記憶に関わるモニュメントを景観あるいは場所との関わりから取り上げた研究としては、これまで、戦災に関するもの<sup>4)</sup>、自然災害に関するもの<sup>5)</sup>が多い。士族反乱については、戦死者祭祀、慰霊について調査を行った今井の一連の研究があり、そのなかで神風連についても扱われている<sup>6)</sup>。ただし、本稿では慰霊ではなく景観のなかでの記念・顕彰に重点を置き、より周辺的なモニュメントや解説板など<sup>7)</sup>まで取り上げることにした。筆者は先に、佐賀の乱の記念・顕彰の景観化について考察している<sup>8)</sup>。本稿ではそれに引き続き、まず、三士族反乱について、モニュメントや解説板などを伴う記念・顕彰の景観化の実態を明らかにする。さらに、負の記憶の景観化に共通

表1 神風連の乱関連のモニュメント類

現	熊本城 周辺	【陸軍建立】「佐賀台湾熊本鹿兒島四役戦死弔魂之碑」(1879年) 「明治九年神風連之變 軍旗染血之跡」碑(1921年),「明治九年神風連之變 将士 奮戦之跡」碑(1921年),「明治九年神風連之變 陸軍少尉阪谷敬一戦死之跡」碑(1923 年),「明治九年神風連之變 軍旗奪還之跡」碑(1924年) 【神風連百年記念事業委員会建立】「神風連討入口」碑,「神風連首領太田黒伴雄奮 戦之跡」碑,「神風連首領太田黒伴雄終焉之地」碑 <sup>1)</sup> ,「神風連 加屋霽堅斎藤求三 郎等戦死之跡」碑,「神風連拳兵本陣跡」碑(以上,1976年)
	要人宅	【熊本市設置・解説標柱】 <sup>2)</sup> 「神風連史跡 熊本鎮台司令長官 種田政明旧居跡」, 「神風連史跡 県令安岡良亮旧居跡」
地	自刃・ 死亡地	(熊本市鳴岩)「敬神党五士自刃遺蹟」碑(花園史蹟顕彰会,1932年) (宇城市大岳山頂)「神風連六烈士自刃之跡」碑(建碑期成会,1971年), (宇城市郡 浦神社)「神風連六烈士ゆかりの地」碑(建碑期成会,1972年) (太宰府市竈門神社)「神風連 立嶋駿太烈士之碑」(明治九年之變百年祭奉賛会, 1976年) (玉名市荒神森跡)「神風連三烈士自刃の地」碑(子孫,1981年) 【熊本市設置・解説標柱】(熊本市松尾町平山)「神風連自刃の跡」, (熊本市谷尾崎 日吉神社)「神風連五士自刃の跡」
現 地 以 外		花岡山官軍墓地(1877年) (現, 桜山神社)「百二十三士之碑」(1885年), 桜山祀殿(1913年)など (熊本市新開大神宮)「敬神党太田黒伴雄先生顕彰碑」(天明村, 1968年) (花岡山官軍墓地)「明治九年十月 神風連之變軍官民戦死者追福碑」(神風連百年記念事業 委員会, 1976年), 「神風連の變百周年之碑」(春日郷土史跡保存会, 1976年) (福岡市宮崎宮)「明治九年の變先覚烈士之碑」(明治九年之變百年祭奉賛会, 1976年)

1) 実際の「終焉之地」は城外であるが、城内に碑がある。

2) 解説標柱は定期的に建て替えられているため設置年は示していない。



図1 佐賀台湾熊本鹿兒島四役  
戦死弔魂之碑



図2 桜山神社境内の勤王党・  
神風連墓地



図3 「神風連拳兵本陣跡」碑  
熊本城内護国神社境内



図4 「敬神党五士自刃遺蹟」碑  
熊本市鳴岩

する特質をみいだすために、フットの4類型に影響を与える他の要因としてどのようなものがあるか、考えていきたい。

## Ⅱ 三士族反乱の経緯とその記念・顕彰

(1) 神風連の乱 神風連の乱は熊本の士族の一グループ、神風連（敬神党）が、散髪脱刀令など政府の洋化政策に反対して起こした事件である<sup>9)</sup>。新開大神宮の神官であった太田黒伴雄を首領とする神風連170人は、1976(明治9)年10月24日夜に挙兵し、熊本鎮台と、鎮台・県政の要人宅を襲撃したものの、翌未明までにほぼ鎮圧された。神風連側の戦死者・自刃者は太田黒を含む115名、刑死者は3名<sup>10)</sup>、鎮台兵のほか軍官民の死者は約130名に及んだ。

乱に関わるモニュメントのうち、まず現地からみていく。神風連の乱に関わる最初のモニュメントは、後述の花岡山官軍墓地を除けば、1879年に鎮台が建立した「佐賀台湾熊本鹿兒島四役戦死弔魂之碑」である。当時は城内への入口で、また城下の中心であり、各街道の基点であった札が辻に、西南戦争「熊本県人殉難碑」と並んで建っている。

神風連が襲撃した歩兵第13連隊営と砲兵営は熊本城の二ノ丸にあった。ここには、大正年間に4基の記念碑が陸軍によって建立された。一方で、乱の100周年にあたる1976年には親神風連の神風連百年記念事業委員会によって5つの記念碑が建てられている<sup>11)</sup>。

また、城外の4か所の襲撃地点のうち、安岡良亮県令と種田正明鎮台司令長官の旧宅跡には、熊本市による標柱がある。一方、神風連メンバーの自刃地・死亡地のうち4か所には碑が建てられ、2か所には標柱がある。

次に、現地以外のモニュメントをみよう。肥後勤王党（神風連はその一派）の関係者に



図5 熊本市中心部の神風連の乱関係地

■陸軍建立の城内モニュメント ●百年記念事業委員会建立の城内モニュメント  
○その他モニュメント(太字)・解説板(細字)のある地点  
ベースマップは地理院地図。

よって、1885年に市街東方ののちに桜山と称される地に、宮部鼎蔵ら幕末の勤王の志士を祀る「誠忠之碑」と神風連戦死者を祀る「百二十三士之碑」が建立された。桜山には1913（大正2）年に祭殿が設けられ、幕末の勤王の志士、神風連戦死者などを祀る桜山祠殿（戦後、桜山神社に改称）として整備されていく。1924年には個人名を刻んだ墓石が並ぶ墓所が完成し、戦後には神風連資料館も開設されている。

また、幕末の志士を祀る花岡山招魂社（1869年）に隣接して、神風連の乱の陸軍将兵の死者を葬る官軍墓地、安岡県令らの墓地が設けられていた（1877年）。のち、招魂社は移転し、神風連100年に際して、親神風連の上記委員会と地元団体による2つの碑が建立されている。

（2）秋月の乱 神風連の決起の3日後、10月27日には福岡県秋月の士族が挙兵した<sup>12)</sup>。今村百八郎ら急進派に率いられた彼ら154人は豊津（福岡県みやこ町）に向かい、旧豊津藩士族に同調を求めるものの、豊津士族の連絡を受けた小倉の歩兵十四連隊によって10月29日には鎮圧されてしまう。敗走の末、幹部は自刃し、一部は秋月に戻って政府側の拠点となっていた学校を襲撃するが（11月1日）、その後捕らえられた。秋月側の戦死者・自刃者は21名、刑死者は2名、軍官民の死者は14名であった。

秋月の乱に関わるモニュメントは神風連に比べ少ない。現地を順にみていくと、決起の際の集結地には解説板があるのみであるが、決起直後に警官が殺害された明元寺には警察による慰霊碑がある<sup>13)</sup>。戦闘が行われた豊津の共同墓地には、ここに埋葬された16人の合葬墓があり、7人の幹部が自刃した朝倉市栗河内にも慰霊碑がある<sup>14)</sup>。

表2 秋月の乱関連のモニュメント類

現 地	（豊津墓地）「秋月士族戦死墓」 <sup>1)</sup> （豊津士族、1880年）、氏名碑（秋月士族町田義意、1877年）隣接 （自刃地）「七士之碑」（遺族ら、1907年） （明元寺）「福岡縣警部穂波半太郎殉職趾」碑（甘木警察署、1937年） 【解説板】（集結地）西福寺跡入口、西福寺跡、田中天満宮
現 地 以 外	（垂裕神社）「懐旧之碑」（同族会、1899年）、氏名碑（不詳）隣接 （福岡市宮崎宮）「明治九年の変先覚烈士之碑」（明治九年之變百年祭奉賛会、1976年） 【解説板】（垂裕神社）「垂裕神社由来記」（垂裕神社）

1) 合葬墓でありモニュメント（慰霊碑）としての性質を有する。



図6 秋月士族戦死墓  
みやこ町甲塚墓地



図7 垂裕神社境内の戦争慰霊碑群  
右が秋月の乱「懐旧之碑」



現地以外では、旧秋月城内の垂裕神社境内に慰霊碑と氏名を刻んだ碑がある。垂裕神社は初代秋月藩主黒田長興を祭神とする神社で、1947年には歴代藩主のほか秋月の乱を含む近代の戦死者も合祀されており、「垂裕神社由来記」（解説板）にはそのことが明記されている。



図8 秋月における秋月の乱関係地

○モニュメント（太字）・解説板（細字）のある地点、ただし隣接する「集結地」は1か所のみ示した。ベースマップは地理院地図。

(3) 萩の乱 秋月の乱と同じ10月27日には、前原一誠率いる萩の乱も勃発している<sup>15)</sup>。松下村塾に学び、新政府で越後府判事や兵部大輔を歴任した前原は、1870（明治3）年に萩に帰ってからは新政府の政策に不満を抱く不平士族の核となっていた。神風連の決起を受けて、前原は奥平謙輔らとともに旧藩校明倫館の門に「殉国軍」の札を掲げる。当初は県庁のある山口へ進撃する予定であったが、防備の手薄な山陰道を東上することになった

表3 萩の乱関連のモニュメント類

現地	（島根県宇龍）「前原一誠之碑」（地元、1954年、1976年再建立） 【解説板】（萩市須佐）「心光寺」
現地以外	（松門神社）「明治九年萩の變 七烈士殉難の地」碑（前原一誠萩の変百年祭顕彰会、1976年、2006年移設）、解説板あり （福岡市宮崎宮）「明治九年の変先覚烈士之碑」（明治九年之變百年祭奉賛会、1976年） 【解説板】「前原一誠旧宅」（萩市）、「奥平健輔」（旧宅跡、萩市）

山口市阿東町の長向寺本堂内には萩の乱の戦闘（敗退時）による弾痕とされるものがあり、そのように掲示されているが、屋内であるためにここには示していない。山口市総合政策部文化政策課編『山口市幕末維新遺跡ガイドブック』山口市、2015、47頁。また、個人墓はこの表に示していないが、萩市下田万の西法寺には前原らを乗せた船頭らが建立した「前原一清墓」がある。田万川町史編さん委員会編『田万川町史』田万川町、1999、761-762頁。



図9 刑場跡から松門神社に移設されたモニュメント



図10 心光寺の解説板  
萩市須佐

た。途中の須佐(萩市)で兵を徴募し、合わせて300人ほどの兵力になっている。しかし、江崎(萩市)まで進んだところで、萩では前原側の家族が虐待されているとの偽報を受けて10月31日に萩に戻り、萩市街の南方で鎮台兵と戦闘が行われることになった。戦闘は11月6日に鎮台側が市中をほぼ制圧するまで続いている。一方、形勢の不利を悟った前原は、東京に出て天皇に伏奏するべく、幹部6人とともに10月31日に萩を船で発つが、宇龍(島根県大社町)で地元警察に知られるところとなり、11月5日に自首した。前原側の死者の正確な数は不明であるが、刑死者7人を加えて約70人以上とされる。一方、軍官民の死者は100人に上った。

萩の乱に関わるモニュメントは少ない<sup>16)</sup>。現地といえるのは、遠く島根県宇龍の、前原らの捕縛地に建立された碑のみである<sup>17)</sup>。なお、萩市街南方の、萩の乱で戦闘が行わ



図11 萩中心部の萩の乱関係地

○モニュメント(太字)・解説板(細字)のある(あった)地点、ただし「大屋一字一石経塚石塔」も示した。ベースマップは地理院地図。

れた地にある「大屋一字一石経塚石塔」（1882年）が萩の乱の慰霊碑としてしばしば紹介される<sup>18)</sup>。しかし、少なくとも、この碑のどこにも萩の乱の慰霊ということは記されていない。また、須佐の心光寺には、萩の乱の際に前原が滞在したことを記す解説板がある。

現地以外で目にすることができるモニュメントも、宮崎宮にある3つの乱全体に向けられたものを除けば1か所のみである。松門神社境内にある「明治九年萩の變 七烈士殉難の地」碑がそれであるが、解説板にもあるように、この碑はもともと市内恵美須町の前原らが処刑された地に建立されていた。この碑が建立された萩の乱百周年の1976年には、前原邸内にも「明治九年萩の變 殉國軍義擧之處」碑が建てられているが、これは非公開である。この他には、旧前原宅、奥平宅跡に解説板があるに過ぎない。

### Ⅲ 記念・顕彰とその場所

(1) フットの4類型 以上みたように、神風連の乱、秋月の乱、萩の乱は、ほぼ同時に起こった士族反乱であるが、記念・顕彰の状況にはかなり違いがある。I でみたように、負の記憶がどのように景観に表現されているかを考察したフットは、「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」という4類型を提示した。これに従うならば、3つの乱は次のように示せよう。なお、モニュメントや解説板などは複数の地点に設けられているが、主要な地点に絞って示した。

神風連の乱	現地（熊本城内）：「選別」、現地以外（桜山神社）：「聖別」
秋月の乱	現地（秋月城下）：「選別」、現地（豊津）：「聖別」、 現地以外（垂裕神社）：「選別」
萩の乱	現地：「復旧」、現地以外（松門神社）：「選別」

ただし、フットは、この4類型は固定したものではないとし、その変容をとらえる必要を説いている<sup>19)</sup>。

まず、神風連の乱についてそのことを確認しよう。神風連の乱の現地、熊本城内には早くから多数のモニュメントが建てられているが、これを単純な「選別」とみるべきではない。早くに建碑を行ったのは陸軍側であったが、それに対抗して、100周年に際しては親神風連側が建碑を行なった<sup>20)</sup>。一見すると「選別」継続でも、対立する2つのアクターによって対抗的に建碑がなされたのであり、モニュメントを2つに区別する必要がある。対立のメディアとしてモニュメントが用いられたことを示す興味深い事例であるといえる。

秋月についても同様のことがいえる。秋月城下では集結地点に解説板があるのみで、乱の最終局面で襲撃が行なわれた（そして秋月士族の副区長らが殺された）学校跡にはそのことを語るものはない。一方で、城下から近い明元寺には警察側の慰霊碑がある。対抗的ではないが、2つのアクターを区別する必要がある。

また、秋月の乱の記念・顕彰は、主要な戦闘の行われた豊津墓地の合葬墓が中心になっている。戦闘の行われた10月29日には供養祭が営まれ、新聞でも報道される。しかし、豊津での供養祭は1986年に始まった新しい行事であり<sup>21)</sup>、豊津ではこれによって「選別」から「聖別」へと変化したといえる。一方で、秋月城内の垂裕神社には第2次世界大戦など他の戦争での戦死者の慰霊碑などとともに、秋月の乱の慰霊碑もある。しかし、現地の

解説板に秋月の乱のモニュメントの存在は記されず、碑文を追わない限り、何のモニュメントかさえ分からない。現状では「選別」ともいいがたいような状態である<sup>22)</sup>。また、秋月城跡で開かれる秋月町春まつりは、元来は全戦役の慰霊行事とのことであるが<sup>23)</sup>、慰霊色は弱いようにみうけられる。主たる記念・顕彰の場が秋月城内から豊津へ移動したといえるかもしれない。

萩についても変化がみられる。上述したように、1976年になって前原らを顕彰する立場から刑場跡に建碑された(=「選別」)ものの、撤去(=再「復旧」)・移転が行われ、2006年以降は松門神社で「選別」されることになった。また、そもそも1976年まで、萩市内にはモニュメントはなかったのであるが、戦場跡にあった「大屋一字一石経塚石塔」で代用して、いつからか一般に「選別」されてきたともみることができる。

(2)「封じ込め」あるいは「スケールのジャンプ」 3つの乱とも、現地とは別の地点にモニュメントがある。ただし、それは「封じ込め」と「スケールのジャンプ」に二分できると考えられる。

まず神風連の乱からみてみよう。時間的変容に留意するなら、親神風連側の記念・顕彰の場は、もともとは桜山神社のみであったことに気づく。現地、つまり城内は陸軍側の慰霊碑のみで、親神風連側は長らく、城内や市中心部に建碑できない状態にあった、つまり桜山に「封じ込め」られていたといえる。それが、100周年で城内に建碑を果たした<sup>24)</sup>ばかりか、花岡山官軍墓地にも親神風連側から慰霊碑が建てられるに至った。親神風連側が神風連の乱の記念・顕彰の主流にとって代わったといえる。

先に、神風連の乱は、現地が「選別」である一方、現地以外の桜山神社で「聖別」されているとした。「封じ込め」という経緯もあり、現地と桜山神社はこのように別建てで論じる必要がある。

次に、秋月の乱については、上述のように、城下には解説板のみであるのに対し、垂裕神社境内には慰霊碑がある。現状をみれば「封じ込め」と判断したくなるが、ここが旧城内に位置する藩主家ゆかりの神社であり、秋月においては特別に重要な場所であったことを考慮に入れる必要がある。つまり、この垂裕神社境内への建碑は、秋月の乱を、個々の現場を超えた、秋月全体にとって重大な事件として意味づけるものというべきである。

このような事態を「スケールのジャンプ」とよびたい。ここでいうスケールとは、世界、国家、地方、県、市町村、近隣、住宅、…といった様々なレベルの地理的スケールのことである<sup>25)</sup>。山崎は「スケールの政治」の特徴としてスケールのジャンプを位置づけており、スケールのジャンプを「一つの地理的スケールで確立された政治的要求や権力が別のスケールに拡張されること」と定義している<sup>26)</sup>。モニュメントというメディアを通して、表象や意味づけが変化していることに注目したい。

秋月の乱については、もう一つ、豊津の合葬墓の問題もある。秋月側からみれば、この墓は現地への建碑に他ならない。ただし、実際に豊津で戦闘が行われた旧藩校付近と、合葬墓のある甲塚墓地はやや離れており、豊津側からみれば、「封じ込め」とみることもできよう。アクターによってスケールが異なっているのであり、豊津現地はフット4類型では「聖別」か「復旧」か、判断が分かれることになる。上述した、記念・顕彰のアクターの判別の重要性がここにも示されている。

萩の乱についても、市内で唯一のモニュメントがある松門神社は、松陰神社境内にある



前原ら松下村塾門下生を主に祀る神社であることをみれば、秋月と類似しているといえるかもしれない。ただし、萩の場合、新規に松門神社に建碑したのではなく、いったん刑場跡に設置されたモニュメントが移転を迫られたことに留意すれば、「封じ込め」とみる方がふさわしい。1976年に処刑地と前原邸内へモニュメントが建てられた際に、前原一誠萩の変百年祭顕彰会は、旧藩校明倫館跡地の明倫小学校に「明治九年萩の變 殉國軍本陣跡」碑の建立も計画しているが、市教育委員会から拒絶されている<sup>27)</sup>。こうした結果、市内の萩の乱関係のモニュメントは松門神社だけになっているのである。

(3)「隠蔽記憶」 熊本において、親神風連側の記念・顕彰の拠点である桜山神社は、幕末の勤王党志士36人と神風連死者を祀る。勤王党のなかでも重視されてきたのが、著名な幕末の志士である宮部鼎蔵であった。1891年には早くも、他の個人墓が全くない状態で「宮部鼎蔵之墓」が営まれ、1963年には宮部の歌碑も建立されている。

一方で、それに先行する1869年には、勤王党に限らず幕末の志士を祀る花岡山招魂社が設けられていた。そして、神風連の乱の官軍墓地や県令の墓地が1877年につくられたのは、その隣接地であった。

すなわち、招魂社に宮部の名が刻まれていたわけではないとはいえ、宮部鼎蔵の名が双方で争奪される構図になっていたことがわかる。親神風連側は、自らの正統性を確保するため、宮部ら幕末の志士との連続性を主張する必要がある、連続性を印象づける景観整備を進めたといえよう。

スターケン (Sturken, M.) は、フロイトの所説をもとに、他の記憶を覆い隠す「隠蔽記憶 screen memory」という概念を提示している<sup>28)</sup>。宮部鼎蔵に関する記憶は、神風連の乱の記憶に対して、このように作用していると考えられる。さらにいえば、宮部に関する記憶が「隠蔽記憶」として有効に機能するためにも、乱の記憶が付きまとう現地を離れ、別の場所が必要だったといえるかもしれない。

秋月や萩においては、こうした「隠蔽記憶」の働きはみいだせない。ただし、萩では、前原一誠がまさに宮部鼎蔵同様に、「隠蔽記憶」になってもおかしくなかったと思われる。前原は「維新十傑」に数えられることもあり、萩の弘法寺に設けられた彼の墓には、「線香壺に溜まる雨水が眼病に効くとの風説」すらかつてあった<sup>29)</sup>。ネイション、ローカルの双方で「隠蔽記憶」化しそうな存在に思えるが、そうっていないことには、萩の乱のモニュメントが僅少であることも合わせ、萩における萩の乱の記念、表象の困難さ<sup>30)</sup>がうかがえようか。

#### IV おわりに

本稿は、負の記憶としての明治初期の三士族反乱―神風連の乱、秋月の乱、萩の乱―について、景観のなかでの記念・顕彰に着目し、考察を行った。

まず、記念・顕彰の景観化について、モニュメントの設置を中心に調査し、現状や変遷を明らかにした。これら三士族反乱の記念・顕彰については、いまだ事態は動いており、終わった問題ではないことにも注意が必要である。

そして、フットが示した、「聖別」、「選別」、「復旧」、「抹消」の4類型にこれら三士族反乱がどう当てはまるか、4類型に影響を与える他の要因としてどのようなものがあるか、考察を行った。例えば、神風連の乱では、現地（熊本城内）が「選別」、現地以外の

桜山神社で「聖別」というように、4類型で示すことができる。ただし、フットが述べるように、この類型は固定したものではない。時間の経過によって変化しており、そこには記念・顕彰をおこなうアクターの違いが大きく関わっている。

また、神風連でもそうであるように、現地以外のモニュメントは記念・顕彰が特定の場所に「封じ込め」られた結果である。ただし、秋月において、旧秋月城内の藩主家ゆかりの神社境内にモニュメントが設けられたことは、個々の現地を超えて、秋月全体にとって重要な出来事として秋月の乱を表象する「スケールのジャンプ」として理解される。

もう一つ指摘できるのが「隠蔽記憶」の存在である。神風連は、著名な幕末の志士である宮部鼎蔵を前面に立てて景観化されていた。宮部に関する記憶は、神風連の正統性を示すとともに、神風連の乱の禍々しい記憶を覆い隠す機能を有しているといえる。

以上のように、本稿では、フットの示した4類型に影響を与えうる要因として、記念・顕彰の「封じ込め」あるいは「スケールのジャンプ」と、「隠蔽記憶」を指摘した。もとより、フットがアメリカの負の記憶から導き出した4類型がそのまま日本を含む他の社会に当てはまるものではない。しかし、様々な負の記憶においてこの4類型を検証していくことで、負の記憶の景観化を比較しうる枠組になるであろう。今後とも他の事例で検証を進めていきたい。

## 注

- 1) 日本における早い時期の成果として次のものがある。羽賀祥二『史蹟論：19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会, 1998, 阿部安成ほか編『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』柏書房, 1999。
- 2) ノラ, P. 著, 永井伸仁訳「序論—記憶と歴史のはざまに」(ノラ, P. 編, 谷川稔監訳『記憶の場：フランス国民意識の文化＝社会史 第1巻対立』岩波書店, 2002 (原著1984)), 29-56頁。
- 3) フット, K.E. 著, 和田光弘ほか訳『記念碑の語るアメリカ：暴力と追悼の風景』名古屋大学出版会, 2002(原著1997), Foote, K. E., 'Shadowed Ground, Sacred Place: Reflections on Violence, Tragedy, Memorials and Public Commemorative Rituals' (Post, P. and Molendijk, A.L. eds., *Holy Ground: Re-inventing Ritual Space in Modern Western Culture*, Peeters, 2010), pp.93-117.
- 4) 大平晃久「長崎原爆落下中心碑にみるモニュメントの構築」九州地区国立大学教育系・文系研究論文集5 (1), 2017, no.15, 上杉和央「沖縄県八重瀬町の戦没者慰霊空間」人文地理70 (4), 2018, 457-476頁など。
- 5) 相澤亮太郎「阪神淡路大震災被災地における地藏祭祀：場所の構築と記憶」人文地理57 (4), 2005, 414-427頁, 川島秀一「津波碑から読む災害観：人々は津波をどのように捉えてきたのか」(橋本裕之・林勲男編『災害文化の継承と創造』臨川書店, 2016) 44-65頁など。
- 6) 今井昭彦「神風連の乱における戦死者祭祀」(今井昭彦『近代日本と戦死者祭祀』, 東洋書林, 2005) 123-144頁。
- 7) プラスチック板あるいは金属板への印字や木製標柱で、耐久性が低く、設置や撤去が費用的にも作業的にも容易なもの。長くそのまま維持されるとは限らないが、現地で記憶を伝えていることには変わりがなく、記念・顕彰の傾向を把握するために加えた。また以下では、モニュメントと解説板などを合わせて「モニュメント類」とよぶことがある。

- 8) 大平晃久「佐賀の乱における記念・顕彰の景観化」浦上地理6, 2020, 8-16頁。
- 9) 以下、歴史的記述は主として次の文献による。徳富猪一郎『神風連の事變篇(近世日本國民史94)』近世日本國民史刊行會, 1962, 新熊本市史編纂委員会編『新熊本市史通史編第5巻近代Ⅰ』熊本市, 2001。
- 10) 神風連側では獄死者、翌年の西南戦争に参加して戦死した者を含め、死者を123名としている。なお、処刑場となった熊本県庁内臨時裁判所(古城, 現県立第一高等学校)にはモニュメント類はない。
- 11) 荒木によれば、5つのうち討入口, 太田黒奮戦之跡, 太田黒終焉之地には、1968年以来、荒木の働きかけによって、熊本市が標柱を建てていた。荒木精之「神風連拳兵本陣跡」(荒木精之編『神風連百年』日本談義社, 1976) 57頁。
- 12) 以下、歴史的記述は主として次の文献による。甘木市史編纂委員会編『甘木市史下巻』甘木市, 1981, 田代政栄編『秋月史考』秋月史考刊行会, 1951。
- 13) 他に、朝倉警察署、嘉麻警察署構内に、秋月の乱時を含む、それぞれの警察署の全殉職者を対象とした慰霊碑がある。
- 14) なお、処刑が行われた福岡市内栢木屋町の浜の刑場跡地(現, 唐人町)には何も設けられていない。また、豊津を除き、陸軍にも秋月側にもこの乱に関わる集合墓地はない。
- 15) 以下、歴史的記述は主として次の文献による。松本二郎『萩の乱：前原一誠とその一党』鷹書房, 1972, 萩市史編纂委員会編『萩市史第2巻』萩市, 1989。
- 16) 陸軍にも萩側にもこの乱に関わる集合墓地はない。
- 17) 一時流失していたものが発見され、現在地に移設された。宍道正年『維新十傑の一人前原一誠と松江の修道館そして大社町宇籠』クリアプラス, 2015。
- 18) 例えば、「萩まちじゅう博物館」企画による「(萩まちあるきマップ) 椿地区おたからマップ」(2016年)にも、「伝 萩の乱供養碑」として紹介されている。なお、この碑の謎解きについては次を参照。青田隆子「前原一誠萩の変紀行：須佐・田万川を中心に」真情113, 2017, 109・110頁。
- 19) 前掲3) 26頁。
- 20) なお、陸軍側のモニュメント群は、神風連に奪われた軍旗を奪還し、体に巻き付けて戦ったために血で染まったというナラティブ(物語)に基づいているが、神風連側は「汚らわしい」軍旗を捨てただけとする別のナラティブを示している。
- 21) 「「秋月の乱」死者を供養 豊津地区住民ら 137回忌命日に」西日本新聞(京築版) 2012年11月1日付。
- 22) 近年出版された、元秋月郷土館長による秋月を紹介する本でもこの碑には言及がない。田代量美『秋月を往く：筑前城下町』西日本新聞社, 2001。
- 23) 「郷土へ愛着(夢語り部の詩・秋月人物風土記3)」西日本新聞1993年5月7日付。
- 24) この背景には、1868年の明治100年にあたって、神風連死者が熊本護国神社(花岡山招魂社の後身)、靖国神社に合祀され、官軍死者などと並ぶ位置になったことも影響しているのだろう。
- 25) 人文地理学において、スケールは「特定の社会的プロセスをおして形成される空間の単位や規模」と定義される。山崎孝史『政治・空間・場所：「政治の地理学」にむけて(改訂版)』ナカニシヤ出版, 2013, 124頁。
- 26) 前掲25) 134頁。
- 27) 前原一誠萩の変百年祭顕彰会編『殉国』前原一誠萩の変百年祭顕彰会, 1977, 36-37頁。なお、「前

原一誠萩の変百年祭」は萩ではなく下関の桜山神社で開催されている。

- 28) スターケン, M.(岩崎稔ほか訳)『アメリカという記憶:ベトナム戦争, エイズ, 記念碑的表象』未来社, 2004 (原著1996), 86-149頁。
- 29) 前原一誠萩の変顕彰会『前原一誠と萩の変紀行』前原一誠萩の変顕彰会, 2016, 5頁。
- 30) 萩の乱は, 明治維新政権のなかからの反乱であり(この点で, 神風連の乱, 秋月の乱と異なる), 長州藩の明治維新の否定になりかねない。ネーションとぶつかるだけでなく, ローカルな歴史ともぶつかる点で, 佐賀の乱とも異なる。佐賀は, 維新政権のなかからの反乱である点は同じだが, 長州ほどその中心ではないし, 他藩出身の大久保や山縣を悪者にできる点でましである。なお, 道路で萩の入り口にあたる道の駅萩往還には, 萩出身の明治維新の志士10名の銅像があるが, そこには不自然にも前原の像はない。ただし, 「前原一誠萩の変百四十周年祭」(2016年)は40年前の百年祭とは異なり萩で開催され, また長州藩の奇兵隊関係者を祀った桜山神社への前原の合祀も実現し(2016年), 萩における萩の乱の位置づけも今後は変化するかもしれない。